

# 教団の現代的な課題への姿勢

— 伝 統 と 創 造 —

長 谷 川 正 徳

現宗研が企画した第一回の教化研究会議（一九六八、九）の席上、発題者への質疑に、いくつもの時事的な問題があった。参院選に因んで教団と政治のかかわりはどうか、自民党政府の企図している靖国神社法案に対して教団人はどう対処すべきか、科学技術時代の教説はどうあるべきか、戦争と平和の問題等。これらはいづれも教化の現場に在るものにとつては、刻下の重要関心事であり、具体的に説明されていなければならぬ課題といふべきであつて、かような質疑や論議が出てくるのは当然であろう。

教団というものは、一面、教学に支えられた宗教集団であるが、他面において、いわば身体的に現実の歴史社会へ編みこまれている社会集団である。伝道や教化のおこなわれる場は現実の歴史的社会的なるが故に、常にいうところの

時事問題をかかえるのであり、これへのじゅうぶんな説明がなされなければ、伝道教化そのものが真に実効あるものとはならない筈である。

そこで、教団が現代的な課題と組みあうときの基本的な条件といったものについて考えてみるに、先づ教学が時事的な現象を生みだす現実というものの内面に深く喰ひこまなければならぬということである。われわれの現在の教学にそれがじゅうぶんなされているかどうか。伝統的な信仰に能う限り純粹に立脚しようと思図することはもとより重要であるが、そのみに終つて現実への窓が開かれていないというのであつては現実無視の觀念教学ということになつてしまう。自らの立場の純化と論理的な精密化がおこなわれる反面に、現実からますます遊離したものになつて

ゆくという現在の教学の状態であつては、教団の實際生活とも云うべき教化伝道が効果的に行われぬのは当然である。

教団の現実遊離、現実への作用力の欠如といわれている事柄は、要するに努力はなされているものの、その教化活動が実効をあげていないことを指しているのである。まづ教学は自らの責を自覚し、自らの根源的吟味を経て、現実の内面に深く触れるものとならなければならない。

この場合、よく理解されていなければならぬことは、現実の内面に深く触れるといつても、それは現実の課題を何もかも教学でもって解決してしまうというのではないということだ。教学は例えば、社会経済の問題に直接的解決を与えたり、政治法律の問題に解決を与えたりするものではない。経済問題は経済学がこれを解決し、経済専門家がこれを實現するし、政治法律の問題は政治学や法学がこれを解決し、政治家や法律専門家がこれを實現するのである。教学がこれ等の事柄に容喙し教学独自の解決法を主張することは誤りである。教学の現実の諸課題との触れあいというものは、このような仕方で行われるのでなく、現実の経済や社会、政治や法律、技術や文明等の根底に深く滲透して、それ等に働らきかけるといふ仕方において行われるの

である。そういう仕方によって、教学は、現実の経済、社会、政治、法律、技術、文明等を現実のものたらしめるといふことである。要するに社会的、現実的諸課題の解決に教学的解決を置き換えようというのではない。

このことの基本的な理解の上に立って、教学は現実へ向い、その窓を開き、現実へ飛びこんで、現実のうちに根ざしながら、しかも伝統の再把握であるといった立場を開かなければならない。この場合、現実の世界と教学との間に窓をつけるものとして、或は通路になるものとして哲学がいちじるしい乖離のみがみられるのであって、これはまことに不幸なことと思われるのである。哲学の方からも教学の立場へ主体的に近づいてほしいし、教学は伝統への内的な理解のみでなく、ひろく哲学的精神というものに立って積極的に哲学への企図をあらわしてゆかねばならない。そうすることによって、教学は現実への窓を開き、通路をつくれるものとなるのである。

次に、時事問題と対決するときの教団自身の姿勢について考えてみなければならない。

いま、わが教団においては護法運動の名のもとに、伝統教団の再創造を目ざして努力している。教団は一つの伝統

であって、いまにわかには作られたものではない。伝統は本来、「受けついでもの」である。過去から受けつぎ、やがて未来に伝えてゆくべきものである。しかし受けつぎ、伝えるといつても、単に生物の遺伝のように繰り返すのではなく、自覚をもって再創造するものなのである。単に伝統を盲目的に学びとり、それに習慣的に追従するだけであるならば、伝統そのものは硬化し、涸渇し、やがて涸渇してしまふのである。伝統は、これを主体性において担いとり、支えもつときにおいてのみ、真に伝統であることができる。この意味で伝統とは単なる繰り返しではなく、不連続の再創造であり、不連続に再創造されることよってのみ自己自身を維持することができるものなのである。

今日、既成教団が涸渇しているといわれるのは、既存の伝統や慣行に追従し、単なるそれへの墨守や模倣に終って再創造への努力を失っている事によるのである。現在の護法運動への批判はさまざまであり、それはそれでまた重要なものであるが、護法運動のもつ伝統の再創造という志向はどこまでも支持され、継続され、伸展されなければならぬ。

教団の現実への作用力が失われたというのは、先に述べた通り教団の精神である教学の閉鎖性によるものであるが

その教学の閉鎖性保守性を許容し、あるいはむしろこれを助長したともみられる教団の側の反省もきびしいものでなければならぬまい。教学と教団はもとより相即的なものであるからである。

教団が、過去から受けついで伝統の墨守に終始してしまえば、教学もまた消極的自己純化と自己保存のみにとどまる。かかる保守的な教学はまた教団へ反映して教団の墨守性偏狭性をいよいよ強めてゆく。全く好ましくない循環作用がくりかえされる。

そこで身体的に現実の世界へ編みこまれていく教団が、その現実からうける刺戟を教学へ伝達して教学の閉じられた窓をひらかせねばならぬということになる。

教団が絶えず自己の伝統の再創造を志向しているかぎり必然、現実の世界の諸問題と真剣に取り組まねばならない。そこに眞の教化というものが成り立つのであるし、また教団の実践といわれるものもそこに在るのである。教団が眞にそういうものとなるとき、教学は教団からの強い要請と刺戟とを常にうけ、必然、現実へ向って自らの新しい可能性を求めはじめるのである。

曾って、皇国無謬思想が盛んであったとき、教団のこうした態度と姿勢はどんなものであったか。それは無謬思想へ

の無批判な追従と適応のみではなかったか。教団が与えられる現実へ無批判に結びつくということは、教団が単に伝統の模倣と墨守に終って、それを自覚的に再創造しようとするところには発生する。伝統の直接的な肯定の態度は、現実の直接的な肯定の態度しか生まない。教団の伝統が単に繰り返してなく、再創造であり、常に自己を創造的に保持していたならば、皇国無謬思想への追従や妥協などあり得ようはずはなかったのである。

当時、一方教学は現実から離れて自らの純化と論理的精密化の方向のみをたどり、他方教団は与えられた現実へ無批判に適応することのみにはしつた。つまり、前者はいわば現実の直接的な否定の態度といふべきであり、後者は現実の直接的な肯定の態度といわれるのもであった。一般に現実の直接的な否定の態度とその直接的な肯定の態度とは実際的にはかえって容易に結びついて現われ得る。何故ならば、両者の態度とも現実の内面に深く喰いこんでいないため、現実の表面の上を一方から他方へ移るのはいとも容易であるからである。

われわれの護法運動が真の教団の歴史的实践であり、生きた教化であるためには、この既往の教団へのきびしい批判と反省が回避されてはならないのである。

ここで、われわれは一昨年日本基督教団が教団総会議長の名をもって発表した「第二次世界大戦下における日本基督教団についての告白」なる文書を想起してみたい。この文書の中で、われわれの注目をひいたのは、信仰と政治の関係について、掘り下げて問題にし論じている箇所であった。即ち告白文書はいう。戦争のさ中、教会は信仰については、一応正しくそれを保持し得たといわれるにしても、国家の歩みという政治的領域においては、教会は見張り役を怠って、戦争を肯定し協力するにいたったではないか。そして過去におけるこのような過ちを今日告白するということは、将来において再び同じ過ちを繰り返さない決意を伴わねばならない。日本が再び憂うべき方向にむかっているとき、教団が再びその過ちを繰り返すことなく、日本と世界に負っている使命を正しく果たすことができるように、――明日に向っての決意を表明する云々と。勇気をもってなされたこの自己批判と決意の表明は、あらゆる仏教の既成教団にとっても即刻なされねばならぬところのものである。

いまや、われわれは積極的に単に墨守された伝統を否定し、さらに否定の否定に転換し、それを創造的に肯定することによって、教団伝統の自己同一性を保持してゆく、か

くして現実のあらゆる諸問題にむかって、果敢に発言し、強力に実践し、深く滲透してゆくものとなるのでなければならぬ。

教団伝統の再創造であるべき護法運動はまさにかくの如き伝統と創造の論理を踏えた生命ある実践運動として展開されるのでなければならぬ。

伝統の偏狭な墨守からは現実無視の姿勢しか生れない。そこにはいかなる時事的な問題も問題として生起してこない。そんな教団が凋死してゆくのは当然であろう。

ともあれ、教団は現代的課題と真に深くとり組むべきである。このとり組みを通して教団は教学へむかって大きな刺戟を与えるであろう。教学はこの刺戟をうけ、自らの再構築をなしとげつつ教団の現実的動きを積極的に方向づけるものとなるであろう。

冒頭に述べた第一回教研会議の質疑にみられる靖国神社問題、政治と信仰の問題、テクノロジー時代の教説の問題等々に対する教団としての明瞭にして具体的、且つ活潑な動きや説明はなされているとはいえない現状である。しかも現場にある良心的な伝道者にとつては、これ等は遲滞を許さざる、いまの自己の実践にかかわる重要問題なのである。

教学と教団が、真に社会的実践性をもち、また歴史的生命として真の創造性をもったものとして再生するとき、「受けついだもの」としての伝統は、将来に「受けつがれるもの」として生々發展してゆくものとなるであろう。